

## 民間企業にもできる地元愛の醸成

加藤

修（応用理学部門、建設部門、総合技術監理部門）

総務省が6月に発表した2020年の国勢調査人口速報値によると、2015年比の人口減少率最大の都道府県は秋田県で、岩手と青森が続いている。つまり北東北3県が人口減少率の上位3位までを独占している。私は直近の約2年間、仕事の都合で秋田県南部の小都市に単身赴任していた。駅前の商店街や飲み屋街は典型的なシャッター通りと化しており、ほぼ例外のない地方衰退の状況を目の当たりにして、自分に出来ることは何なのだろうかと考えていた。

秋田県は全国の中で少子高齢化が最も進行しており、特に人口減少は深刻な状況である。秋田県の消滅を本気で心配している地元出身の同僚もいる。人口減少の理由はいくつかあるが、若者の多くが高校卒業と同時に進学や就職で他県へ転出し、戻ってこない事があげられる。高賃金や生き甲斐を求めて大都市の企業に就職したり、高度な学問や技能習得を目指して他県の大学等に進学したりすることは悪いことではない。重要なのは、どのようにして呼び戻すかということだと思うのである。

単身赴任先で参加したあるシンポジウムにおいて、地元の誇れるものを学習することで「地元愛」が生まれ、それが若者のUターンにつながることを期待するという議論があった。「地元学」という地域づくりの手法が知られているが、これは地域の人々が地元にあるものを探して地域おこしにつなげる取り組みである。私は単身赴任ということもあり、地元学の担い手になることは困難なので、会社の事業をアピールすることで地元愛醸成に一役買いたいと考えた。幸いにも当社の事業はその地域に根差し、僅

かであるが地元の役に立っていると思っているので、地元の若い人たちが自分事のように自慢できる存在になれるかもしれないと考えたのである。ただ、幸か不幸か、この取り組みを本格化させる前に単身赴任は終わってしまったのである。

岩手に戻った今年の6月、会社施設の見学者案内をする機会があった。見学者は県内トップクラスの進学校の生徒である。見学中、どのような質問が出るか身構えていたが、私の持ち場では質問は1件だけであった。質問が少ないのは説明が悪いのか、参加者に興味が無いのかのどちらか又は両方と思われるが、たぶん説明が悪かったのだろうと反省した。しかしその2日後、同じように地元の小学5年生を案内したところ、矢継ぎ早にいくつも質問され、活気に満ちた見学会となった。秋田で成しえなかった事が、少しできたような気がした。この見学をきっかけに地元愛が高まれば、一旦は地元を離れても、やがて戻ってきてくれるのではないかと期待したくなるものである。

地元新聞やテレビ等において、小学生らによる公共施設見学の報道がよく見られるが、民間企業の報道は少ないように思う。県内にも、地域の特徴を生かした事業や活気のある企業は数多く存在するはずである。行政等が主催するイベントへの参加や協力要請などを受け入れる企業が増えれば、小中高生たちが地元を知る機会も増え、やがては若者の地元定着につながるのではないだろうか。そのようなことを期待しながら、まずは自分自身の見学者への説明能力を上げようと試行錯誤している。